現代座 通巻 501 号　年４回（3月1日、6月1日、9月1日、12月1日）発行　　1967 年 2 月 18 日 第三種郵便物認可

共生のきずなを求めて！

NPO 現代座

2024 年 6 月 1 日　発行
（通巻 501 号）定価 100 円

現代座レポート　No. 98

・語り芝居「武蔵野の歌が聞こえる」　(1)
・2023 年度ＮＰＯ現代座　活動報告と今年度の方針　(2)
・東京都へ提出した NPO 活動計算書　(3)
・われらいずこより 1982 年【統一劇場の終結】　(4-7)
・お知らせ　(8)
・会館日誌・会員入会・継続・寄付　(8)

NPO 現代座ホームページ　http://www.gendaiza.org/

特定非営利活動法人 ＮＰＯ現代座　発行責任者：木村快
〒 184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号　TEL 042-381-5165（代）　FAX042-381-6987

語り芝居「武蔵野の歌が聞こえる」

◆正面奥がＡ室、手前がＢ室と本来は二つの会議室だが、間仕切りを外すと、かなり広い空間となり、劇場となる。（山本幸則撮影）

◆左から　東志野香　木下美智子　八木浩司　黒澤義之
・基本を語りで進め、はっきりした場面ではとっさに役柄を演じる。（山本幸則撮影）

語り芝居「武蔵野の歌が聞こえる」は5月12日（日）午後1時半から、小金井市の公民館貫井南分館で「第40回貫井南センターまつりプレイベント」として公演しました。

◆舞台のない平土間の会議室で、地域の皆さんに楽しんで貰うにはどうしたらよいものか。これはお芝居を観て貰うのではなく、その場にいる人たちに、「江戸時代にこのあたりで、こんなことがあったんですよ」と語りかけ、一緒に確認することを大事にしようと思いました。

皆さんに楽しんでもらうために、初演の大舞台で活用した表示版や小道具をできるだけ活用しました。さらに小金井市に残る新田開発地を示す新しい地図も作りました。

そして最後に歌い上げる「さくら咲く村」の歌は舞台がはじまる前に皆さんに覚えて貰って、舞台の最後では一緒に大合唱しようということにしました。

◆客席は50席用意しましたが、57人の方が来て下さいました。高齢の方も多く、3列目から後ろの方は俳優の顔しか見えないかもしれないと心配でした。最後の歌も、皆さん歌ってくださるかと不安でした。

ところが最初に皆さんと歌の練習を始めたら、皆さん積極的に歌ってくださいました。公演中も笑ったり、うなずいたり、そして最後は本当に大合唱になりました。

公演後、たくさんの方が声をかけてくださいました。また、ほとんどの方がアンケートを書いてくださいました。「小金井の歴史がよくわかりました」、「これなら子どもでもよくわかる。子どもたちに見せたい」、「一緒に歌えて楽しかった」など、多くの励ましを頂きました。

◆語り芝居「武蔵野の歌が聞こえる」

江戸時代、享保の改革と呼ばれる１７００年代、大地震の連続で食糧が確保できなかったため、第八代将軍・徳川吉宗は武蔵野台一帯の荒れ地の開発を命じます。けれど幕府の役人が進める開発は10年たっても出来ません。幕府はついに農業指導者川崎平右衛門に開拓を依頼します。

平右衛門は村人に「みんなで助け合う自分たちの村を作ろう」と呼びかけ、82の村をつくります。日本で始めて生まれた協同システムの村です。また、玉川上水の両岸を桜並木にし、みんなで楽しむことを大事にしました。

◆上演時間は始めの歌の練習も含めて1時間15分です。出演者４人とピアニストでどこにでも出かけていきます。ぜひ声をかけてください。

（木下美智子）

2023年度NPO現代座
活動報告と今年度の方針

◆財政報告

左の活動計算書は東京都に提出するものです。

2023年度も384人の会員の皆さんからの会費1,296,000円と、43人の寄付287,800円で支えていただきました。本当にありがとうございました。

昨年度はコロナが治まってきたことから、ふたつの芝居の公演を行い成功させることができました。また現代座ホールと3F小ホール等を使用しての稽古や公演も30団体あり、財政は1,234,934円の黒字になりました。

◆『新版・武蔵野の歌が聞こえる』の上演

2023年5月26日（金）から28日（日）までの3日間、A班B班の2チームがそれぞれ3ステージずつ、合計6ステージの公演を行い、282人に参加していただきました。

2014年から17年まで公演した『合唱構成劇・武蔵野の歌が聞こえる』を、どこにでも出かけて行ける中型の短い芝居にしようという試みでしたが、同時に新しい創造者に参加してもらう事も目標にし、5人の新しい俳優が出演してくれました。

◆『わすれものはありませんか?』の上演

2018年に亡くなった武本英之さんの追悼公演をやっと実現することができました。2008年に初演した武本氏の第1作です。新しい出演者での再演は大変好評でした。

9月29日（金）から10月2日（月）までの4日間5ステージの公演で240人の参加者でした。命日の9月30日には終演後、武本さんの思い出を語り合う「追悼の集い」も行われました。

そして12月1日には「くらしの足をみんなで考える全国フォーラム」主催の『観劇シンポジウム』でも上演する事ができました。全国から集まったタクシー関係者、移動支援、研究者の皆さんに見ていただきました。

◆「誰でもできる朗読教室」は8年目に入りました。水曜と木曜の昼、夜の4クラスで月2回の教室です。継続する受講者が多く、今は25人でほぼ定員いっぱい。新しい人をどう受け入れていくかが課題です。半年間の成果の「発表会」は2日間にわたって開かれ、毎回感動的です。

◆現代座ホール

公演をする地域の劇団や若い劇団は11団体。稽古をする劇団も増えてきました。

昨年度は1階のトイレを改装する事が出来ました。しかし古い建物ですから雨漏りが問題です。修理しては確認していますが今年度にも引き継いでいる問題点です。

◆地域との繋がりを

・地域のお年寄りの「緑町ふれあいサロン」は楽しく続いています。

・小金井のアーティスト「腹話術師いずみ」さんと落語家の林家きなこさんによる「でみcafe寄席」を3F小ホールでやりました。今年も継続していきます。

・「遊び・文化NPO小金井こらぼ」さんが、2階の会議室を使って「こども将棋大会」を6月から2月まで10回開催しました。

・現代座も入っている「緑町第2町会」では役員会や総会を2階の会議室でやっていますが、昨年度は「スマホ教室」も開催しました。

2024年度の活動

今年度はすでに5月に、舞台のない会議室で上演できる「語り芝居・武蔵野の歌が聞こえる」を公演しました。

メインは木村快作「出航」の公演です。来年の2月1日から9日まで現代座ホールでの公演を目指して準備しています。出演者17人、スタッフを加えると20人の大型舞台になります。

よりいっそう地域の皆さんと出会い関わり合って、いっしょに劇場を創る活動を考えていきたいと思っています。

（木下美智子）

2023年度　活動計算書

2023年3月1日から　2024年2月29日まで

特定非営利活動法人　NPO現代座

（単位:円）

科　　目	金　　額		
Ⅰ　経常収益			
1　受取会費		1,296,000	
2　受取寄付金		287,800	
3　受取助成金等			
公共団体補助金	1,810,000		
民間助成金	0	1,810,000	
4　事業収益			
①地域劇場づくり支援事業収益	4,295,300		
②制作上演事業収益	1,577,000		
③セミナー事業収益	504,000		
④国際協力事業収益	0		
⑤まちづくり事業収益	0		
⑥子ども健全育成事業収益	0		
⑦会報発行事業収益	0	6,376,300	
5　その他収益			
受取利息	30		
雑収益	113,865	113,895	
経常収益　計			9,883,995
Ⅱ　経常費用			
1 事業費			
⑴ 人件費			
給料手当	1,624,800		
⑵ その他経費			
制作・準備費	0		
創造・上演費	864,388		
交通・通信費	960,712		
資料・印刷費	28,367		
消耗品費	1,372,482		
会報・HP経費	484,570		
その他経費　計	3,710,519		
事業費　計		5,335,319	
2　管理費			
⑴ 人件費			
給料手当	312,000		
⑵ その他経費			
通信運搬費	226,412		
消耗品費	336,070		
雑費	383,460		
光熱水道費	1,093,239		
租税公課	821,500		
減価償却	141,061		
その他経費　計	3,001,742		
管理費　計		3,313,742	
経常費用　計			8,649,061
当期正味財産増減額			1,234,934
前期繰越正味財産額			33,593,797
次期繰越正味財産額			34,828,731

当期において、その他事業は実施していません。

木村ノート◆われらいずこより来たる 第3部
⑱1982年　統一劇場の終結
木村快

【第1部】日本新劇史・資料からのまとめ
①・レポート81号　1950年、新劇運動の分裂
　中間派は「ヴェリテ・せるくる」を設立。
②・レポート82号　1951年、ヴェリテ解散。
　真山、草村、槇村で新制作座。
③・レポート83号　1954年、庶民の新劇を標榜
　労働組合関係者の支持で全国公演が始まる。
【第2部】活動に参加した木村快の視点から
④・レポート84号　1959年(1)特別研究所開設。
⑤・レポート85号　1959年(2)巡演活動の実態
⑥・レポート86号　1960年　安保闘争。
　平和集会では国際的要人からも注目が集まる。
⑦・レポート87号　1963年(1)
　インドネシア訪問日本文化使節団の公演記録
⑧・レポート88号　1963年(2)
　ユートピア新制作座文化センター設立。
⑨・レポート89号　1964年
　ユートピアの破綻・劇団員・従業員の首きり。
⑩・レポート90号　1965年(1)
　世の中から捨てられた若者たち
【第3部】生まれ変わって
⑪・レポート91号　1965年(2)
　新しい生き方を探して
⑫・レポート92号　1969年　最初の試練
⑬・レポート93号　1970年　新しい劇団を
⑭・レポート94号　稽古場建設と映画『同胞』
⑮・レポート95号　1975年　十年間を振り返って
⑯・レポート96号　創立十周年を迎えて
⑰・レポート97号　1977年～統一劇場大転換

⑱1982年「統一劇場」の終結

統一劇場は1965年、当時日本最大の職業劇団として知られた新制作座から、予告無しに解雇された70人が、争議団として結集したことから始まった。

新制作座では年間を通じて、幾つかの小グループに分かれて活動していたから、同じ劇団に所属していながら、お互いの顔もよく分からない寄せ集めだった。

新聞報道では「劇団乗っ取りを策した左翼の若者の反乱か」などと書きたてられたため、指導経験など全くない木村（当時29歳）がリーダーを押しつけられたが、一体どうしたらよいのか判らなかった。

木村の体験では、新制作座は全構成員が100人を超えたころから一体感を失っていった。しかし30人前後のグループ内では伝統的体質として一体感を持っていた。そのため構成員が増えたら、幾つかの劇団に別れようと話し合っていた。

1972年に、石塚克彦を軸に若手グループを編成したときは、将来独立することを前提とした。

1973年に新しい稽古場が完成したとき、劇団員は90人を超していた。そこで1975年の総会で、劇団を適切な規模に再編成しようということになった。

そのためにはどんなことに留意する必要があるかと議論を重ね、支援を受けていた山形雄策氏の意見を伺った。（レポート91号、95号に紹介）

結論として、30人前後の基本チームをいくつか作ることになる。そのためには劇団員一人一人が自立できるよう、作家演出家育成のための山形教室、グループ活動実践の場としての「希望ホール」の活動を展開した。そしていよいよ統一劇場を終結し、新しいチームを編成する段階を迎える。

この号まではそんな経過を記述してきた。
（註・今号では適宜木村の年齢を付記する。）

【どのように再編成するのか】

いざ再編成するとなると、いろいろ難問が見えてきた。創立古参メンバーは家族持ちが増えており、子どもたちは中学生もいて、すでに10人を超えていた。保育も含めて、それぞれ今後の生活のあり方を独自に考えなければならなかった。また当然、自由に活動できるメンバーとの間には将来への考え方も違ってくる。

その点、1972年に設立した若手グループは、70年代以降の入団者が中心だったから、チーム全体が古参メンバーとは違って生活感覚も新しく、よく結束できていた。

◆所属先は自己決定

1981年、ひとまず三つのユニットグループをつくり、1982年までに各人の所属を決める。そして3年間活動してみて、順調であればそれぞれ別法人として独立することになった。

・総会で決めた三原則
①ユニットの選択は現在どの部署に属していても各自の自由選択とする。
②ユニットはお互いの活動に干渉しないこと。
③財政は独立採算ですすめる。

◆各グループの状態
①「ふるさときゃらばん」
　1972年設立の若手チームは独立の準備も進んでいたし、劇団名も「ふるさときゃらばん」と決まっていた。財政的にもに蓄積を持っていた。
②「劇団希望舞台」
　古参中堅の中でも、独自にチームを作りたい者は1982年までに態度を決めることになり、最終的に「劇団希望舞台」となった。

③残留組

統一劇場創立に関わった古参メンバーは立場上、法人としての最終的な責任をとらねばならなかったから、残るしかなかった。

残留組は名称を「グループ出航」とし、事情が許すなら、せめてあと5年は続けたいと願った。これは後に「現代座」となり、さらに「ＮＰＯ現代座」となる。

◆資産の分譲

統一劇場が所有する舞台機材、輸送トラック、移動用のバス、手持ち資金は三分割して平等に分けた。

◆本部稽古場をどうするか

稽古場・本部の建物はできれば3グループ共有にしたかったが、「きゃらばんグループ」はあくまでも独自の行動をとりたいので、本部稽古場も売却して三分割して欲しいとの声が上り、税理士立ち会いのもとで資産内容を公開した。

株式会社統一劇場は、実は8千万円の負債を抱えていた。負債を三分割するわけにもいかないので、いろいろ話し合った結果、残留組以外はそれぞれ外部に独自の事務所、稽古場を開設することになった。

残留グループは8千万円の負債を抱えたままの出発となるが、いずれ家計のためにそれぞれ自立することを決めていたので、最後の負債処理は社長名義人・木村快の責任で対処することにし、続けられるところまで頑張ることにした。

【統一劇場を支援してくださった方々】

創立以来18年間、支援してくださった々

★山形雄策さん　戦前は山田耕作オペラの文芸部・金曜会、東宝映画社専属の脚本家。戦後は反商業主義的な映画制作運動の指導者として知られる。

★毎熊康尚さん　小金井市役所労組の指導者。争議団が奥多摩の山奥に集っていることを知り、小金井に拠点が出来るよう、様々な面で奔走して頂いた。

★高柳新さん　1971年に木村が倒れて入院した時の担当医師。以後、海外取材の時は現地の医療事情などを調べ、目まい止めの注射液と処方箋を用意してくれ、医療関係者の間でも支援者を広げてくれた。

★山田洋次監督及び撮影スタッフの方々。　1970年以来、常に支援して頂き、新年会、忘年会も一緒にやった。

★福田定良さん　実は1960年まで法政大学文学部長を勤められた教授。戦時中、軍属としてインドネシア・ハルマヘラ島へ派遣された経験もある。1960年の学園紛争で退職。『記録と人間～演劇と教育をめぐって』という学術書で統一劇場の活動を紹介。「先生」と呼ばれるのを嫌って、ぼくらには「定良さん」と呼ばせていた。専門は「日本芸能史」。

★川上徹さんは出版社・一光社の編纂者として山田洋次、木村快、島田豊の共著『日本人と人間関係』を出版した人。決して表に顔を出さない人で、やがて自ら「同時代社」を設立し、統一劇場の出版物を企画し、採算無視で出版し続けてくれた。希望ホール時代は3年間、時代が求める学者・文化人の講演会「現代ゼミナール」を開催して、知識人の間でも統一劇場支持者を広げてくれた。

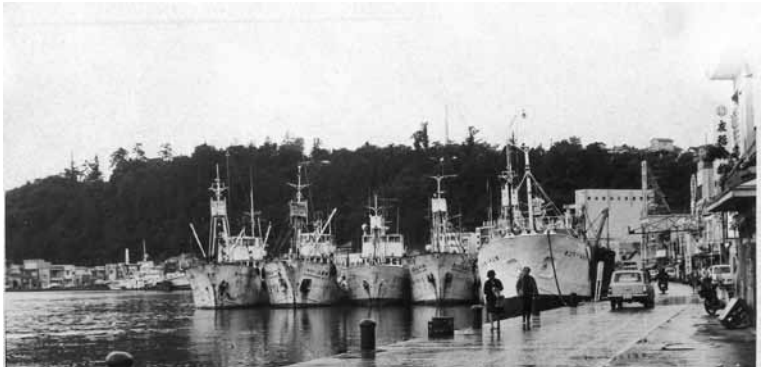
これは「グループ出航」になってからの写真だが、都立・小金井公園に使われなくなった蒸気機関車「C57」が陳列されたとき、子どもたちを連れて行った。劇団分割に当たっては、いつもこの子たちのことが気になっていたからだ。

この子たちの未来にどのような世界が待ち受けているのか判らないが、せめて大人も子どもみんな一生懸命、前に向かって生きていた記憶だけは残しておきたかった。

【統一劇場最後の作品『出航』への道のり】

統一劇場の最終作品は木村に任されたので、永年取材を続けてきた、遠洋漁業から閉め出された失業漁船員の話を上演したかった。というのも、ぼくら統一劇場は失業者集団から始まったのだし、船の中だけで暮らす船員たちは、劇団の中だけで暮らすぼくらとよく似ていた。

取材の歴史を辿れば１９７０年、函館ドック造船所で１週間ばかり働いてみたことから始まる。当時、多くの失業した遠洋漁船員が臨時雇いとして働いていたからだ。仕事中には話は出来ないが。仕事が終わってドック内の大浴場で汗を流すとき、元漁船員とくつろいで話すことが出来た。帰りにはドックの近くの居酒屋で、酒を呑みながら話すことも出来た。



◆１９７７年９月、希望ホール幕開けのために『港で拾った花』を制作していたとき、石巻市にあった劇団の準備事務所へ立ち寄ったので、石巻港へ行ってみた。

すると偶然、母船式の５隻の遠洋漁船団が停泊していた。長い間取材を続けていたが、こんな船団を目撃したことはなかった。

この年は世界中の沿岸２００海里漁業規制が宣言され、遠洋漁業は壊滅的な打撃を受けていたし、北洋サケマス漁業もすでに終わっていた。やがてこの船団も消えて行くのだろう。まるで別れの挨拶に来てくれたような光景だった。彼らはこれから何処へ行くのだろう。

この漁船を見ているうちに思わず「北の海へ」という詩を書き、岡田京子さんに頼んで曲を付けて貰った。

翌１９７８年２月、ぼくらは統一劇場最終段階の行事、希望ホール開設の挨拶として、統一劇場を船に例え、『港で拾った花』の主題歌「さようならよい旅を」と、この「北の海へ」を合唱した。観客は総立ちになって拍手を続けてくれた。

『港で拾った花』は最終作品のプロローグになった。そしてこれから準備する『出航』は、統一劇場が新しい世界へはばたく歌になると思った。

♪・「さようなら良い旅を」（作曲・安達元彦）

別れの心は悲しいけれど
君には新しい旅の始まり
さようならよい旅を　さようならよい旅を
いつまでも幸せな　旅を続けて欲しい

♪・「北の海へ」（作曲・岡田京子）

灰色の空だよ　北へ向かう船
またこの船に　戻ってきたよ
陸（おか）で暮らすつもりで
いたんだけれど
いつも同じことの　繰り返しなのさ
北の海へ行って　また働くよ
どうせ果てるなら　海で果てるよ

『港で拾った花』

廃船で失業した三人の若い漁師は、波止場で泣いてる娘と出会った。彼らを見ておびえる娘をなだめると、兄を訪ねてこの街に来たのだが、街でハンドバッグを奪われ、無一文となって途方に暮れていた。

「クヨクヨするんじゃねえ。俺たちも同じだ。これから何かいいことがあるかも知れんぞ。スッキリ行こう！」

漁師たちは、行きつけのカフェの主人に娘を預って貰い、娘のために街中、兄を探して回る。娘はカフェの仕事を手伝い、すっかり元気になった。ところが漁師たちがやっと見つけた兄とは、実は娘の夫で、すでに別な女性と再婚していた。

娘が東京へ帰るとき、漁師たちは男のことは内緒にして、黙って送り帰すことにした。しかし、連絡船に乗る前に娘は漁師たちに意外な礼を言った。

「どうもありがとう。実は私が探していたのは夫だったの。でもちゃんと話し合って離婚手続きも済ませてきた。新しい奥さんとも会った。もうすぐ赤ちゃんが生まれるって。でもね、私はあなた達から教わったようにスッキリして生きて行くわ。この連絡船は私の新しい出発の船なんだ」

娘はそう言って新しい人生を目指して帰っていった。

【出航】

いよいよ統一劇場最後の作品として、１９８１年から８２年にかけて『出航』を上演することになった。住み慣れた統一劇場が閉ざされ、未知の海へ漕ぎ出さねばならぬ自分たちの運命を重ねた物語である。

◆北洋漁業で活躍してきた第十六宝竜丸も北洋からは閉め出され、その上船主が病気で亡くなり、経営の見通しが立たない。若い漁師たちは陸で仕事をみつけて働き始めるが、なかなか思うようにはいかない。船頭（漁船の総監督）は何とか船を出そうと走りまわっていたが、出航の見込みが立なかった。

ついに宝竜丸の廃船が決まった。いつも出航祝いや安着祝いで集まる食堂で廃船式が行われた。漁を取り仕切る船頭以下、ボースン（甲板長）、漁師と家族、漁業関係者が集まった。

船主の未亡人は「申しわけない。申しわけない」と言いながらそれぞれに別れの酒を注いでまわった。

そのとき、宝竜丸の初代船長を務めたという老人がなにやら小声で歌い出した。みんなシーンとなって耳を澄ました。それはかつて漁が華やかだった時代の沖揚げ音頭の一節だった。

音頭はやがてみんなの大合唱となり、漁師たちは無心になって踊りだす。荒波と戦って生きた日々の情景がみんなの心を揺さぶった。女たちも共に歌い、泣いた。

一人の漁師が船頭に向かって叫んだ。

「船頭！　もう一度船を出してくれ。どうせ死ぬなら海で死にてえ！」

「これ以上親父（船主）に迷惑はかけられん。親父の屋敷は抵当に入ってるんだぞ」

そのとき、女船主は覚悟を決めた。

「よし、船を出しましょう！　私だって行けるところまで行くよ」

解散式は一転して出航式となった。

第十六宝竜丸は新しい漁場を探して、未知の海へ出航することになる。たしかな見通しがあるわけではないが、不安におびえて逃げ回るより、仲間とともに海で働くことを選んだのだ。漁師たちはまた相変わらず冗談口をたたきながら出航して行った。

集団で生きてきた人間には確かに独特の生活心情がある。それは演じるぼくら「統一劇場」の気持ちそのものでもあった

◆思い切って日本最大の遠洋漁港、静岡県清水市で幕を開けた。同じ運命にある漁業関係者は熱狂的な歓声をあげて、励ましてくれた。

『出航』は東京東横ホールで招待公演を行った後、取材地である北海道一帯、さらに関西、関東、長野で公演を続け幕を閉じた。全公演回数１９５回。

◆そして１９８２年12月、18年間の「統一劇場」を終結し、「ふるさときゃらばん」、「希望舞台」、「グループ出航」へと、それぞれ独立劇団としてスタートを切った。このとき、木村は47歳だった。

◆残留組「グループ出航」は「第二次統一劇場」として継続し、１９９０年に「現代座」と改名して、１９９７年に解散する。

ところがそんな時、諫早湾干拓事業で窮地に追い込まれている漁業グループから支援を頼まれ、やむなく木村個人として１９９８年から『虹の立つ海』の公演を開始。さらに周囲からＮＰＯ活動を続けてくれないかとの要請があり、２０００年からは特定非営利活動法人「ＮＰＯ現代座」として活動している。

◆２０２４年現在、木村も88歳である。現在は統一劇場時代のメンバーは５人しかいないが、この10年くらいの間に関わり始めた新しいメンバーが活動を支えている。

【終】

お　知　ら　せ

TEL：042-381-5165
FAX：042-381-6987

クリスタルボウル音浴会

　クリスタルボウルは水晶からできた「おりん」のような形の楽器です。その音は科学的にもリラクゼーション効果が認められています。
　軽いストレッチ等で身体をほぐし、ごろんと寝転んでクリスタルボウルの澄んだ音色と響きを全身に浴びるリラクゼーションと癒しの音浴会です。

奏者 / 講師 西川尚美

【日　程】2024 年 8 月 3 日（土）
　　① 11:00 ～ 12:30
　　② 13:30 ～ 15:00
【参加費】3,000 円
【会　場】現代座会館 3 階

要予約
ヨガマットかバスタオルをお持ちください

詳細 現代座ヨガ教室便り
https://gendaizayoga.blog.jp/
予約フォームの QR コード
gendaiza.ticket@gmail.com まで
メールにて

「木村快との劇場文化雑談会」

　木村快は 88 歳になりました。昭和 11 年 2 月に旧日本植民地朝鮮で生まれ、終戦後引き揚げてきて広島で育った人生と、「劇場づくり」にこだわってきた「統一劇場」から「現代座」の活動など、様々なことを気楽に膝を交えて語る小さな集いを企画しました。

「興味を持ってくれる人が集まってくれたら、
　　何でも話すよ」と木村快は言っています。

不定期で開催予定です。

【日　程】第 1 回　2024 年 7 月 13 日（土）
　　14:00 ～ 16:00
【会　場】現代座 2F 和室

参加したい方はご連絡ください。

　第 1 回に参加出来なくても、参加希望の方は今後の予定をお知らせしますので、連絡ください。

担当：木下美智子

現代座会館　3月～5月　活動日誌

3月9日　「現代座レポート97号」発送作業
17日　現代座会議
4月7日　現代座「出航」会議
　　ＮＰＯ現代座総会
5月4日　現代座会議
12日　小金井南センター
　　「武蔵野の歌が聞こえる」公演
第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】
2月29～3月3日　「ながめくらしつ」公演
3月8～10日　「劇団Ｃ倉庫」公演
11～24日　「劇団仲間」稽古
29～31日　『劇団ヨセアツメカラ」公演
4月7～16日　「偉伝或～イデアル」稽古
21日　現代座会員の集い「同胞」上映
23～27日　「劇団影法師」稽古
5月3～5日　「ハトノス」稽古
6～26日　「おぼんろ」稽古

【三階小ホール】
3月25日、4月22日、5月6日
　　小金井女声合唱団
3月4日～5月10日（16日間）
　　「武蔵野の歌が聞こえる」稽古
4月14，27日　「ハトノス」稽古
5月18，19、25日　「ハトノス」稽古
　　隔水曜・木曜日　朗読教室
　　毎火曜・木曜日　ヨガ教室

【二階サロン】
3月23、4月27日　緑町第2町会役員会
4月10，14、5月8日
　　「武蔵野の歌が聞こえる」稽古
5月18日　緑町第2町会総会
　　毎水曜日　熟年会

ＮＰＯ現代座の会員になってください

●年間４回発行の活動レポートをお送りします。
●会員による企画行事をお知らせします。
●お申し出があれば、上演舞台の録画ＤＶＤをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）
一般会員　　3,000 円
協賛会員　　10,000 円（１口以上）
郵便振替口座番号　00110-7-703151　ＮＰＯ現代座